

## 研究班報告 3 Media Studies Working Group

## 歴史の都市 現在の都市—東北三省省都雑感

神谷昌史

Media Studies Working Group の活動の一環として、本年度も〈対外観と国内政治研究会〉を開催し、共同研究を行った。これは武田知己氏をキャップとし、学外からも講師や参加者を得て、20世紀前半の日本の対外観・国際秩序観と国内政治との関係を、主に日中関係を基軸として検討する研究会である。本年度は、李曉東氏（島根県立大学）の「清末留学生と日本の教育者たち」、Eddy Dufourmont 氏（東京大学大学院）の「安岡正篤と天皇機関説事件：1932-5年の政治史を再考するために」の報告を得た。

また、数年来続けている〈『中央公論』を読む会〉も引き続き活動している。こちらは本研究所の研究員・副研究員で構成され、『中央公論』に掲載された辛亥革命期の中国論を読み合わせるものである。

ふたつの研究会に参加するメンバーは、政治史、外交史、思想史など、歴史を専門としている者がほとんどである。これらのメンバーは、細分化され精緻化した反面、タコソボ化する傾向もある歴史研究の現状に対し、相互交流の必要を痛感している。われわれの研究会は大変ささやかなものであるが、そうした交流の場となることを願って運営しているものである。

さて、上記のふたつの研究会の主要テーマが日中関係史の検討と再考であることは既に述べた通りで、このテーマは近年多くの研究者によって共有されている。筆者もそのうちの一人であるが、縁あって、2006年9月より中国の東北師範大学に日本語教師として赴任することになった。渡中の機会を得たことは、日中関係史を再考する上で大変有益となろう。ただし残念ながらまだその成果を開陳することはできない。そこで本稿では、中国に来てから訪れた、近代日中関係史に縁の深い都市（長春・瀋陽・ハルビン）について、エッセイふうに雑感を述べてみたい。

## 長 春

私の勤務先である東北師範大学は中国東北部の吉林省長春市にあり、日本語教育では中国有数といわれている。東北部は周知のように、1945年までは満洲国があった場所であり、長春はその首都（新京）であった。新京は20世紀の初頭より日本の手によって大掛かりな都市計画が立てられ、整備がなされた都市であった。その痕跡は現在も、そこかしこに見ることができるように思われる。たとえば私が長春に来てすぐに感じたのは道路の道幅の広さであり、幹線道路沿いには電柱が見当たらないことであり、公園や緑が豊かなことであった。こうしたことはすべて、日露戦後の満鉄による付属地の市街計画や満洲国の都市計画に源流を持っているようである。越澤明著『満洲国の首都計画』（日本経済評論社、1988年。ちくま学芸文庫、2002年）に詳しいが、街路は系統的に整備され、「幹線道路では美観の観点から電柱・架空線の路上施設を禁止し」（前掲書、文庫版160ページ）、多くの公園が設置され、幾多の街路樹が植えられた。その他、上下水道の完備など、様々な社会資本が充実していたが、現在においてもそれらの「遺産」を上手く引き継ぎ、使用しているとの印象を受けた。水資源確保のため30年代半ばに作られた貯水池である浄月潭は、今ではスケートやスキーを楽しむことのできる市民の憩いの場になっているし、東北師大のすぐそばにある動植物園は戦後すぐ閉鎖され、40年ほどそのまま放置されていたが、1988年に再開し、隣にある体育施設とともに多くの市民のレクリエーションに役立てられている。旧満洲国時代の建築物も同様で、関東軍司令部だった建物が現在、中国共産党吉林省司令部として使われているなど、こうした例は枚挙に暇がない。

もちろん、このような古い「遺産」を上手く活用している例ばかりではない。市街地の中心にある広大な南湖公園をはじめ、動植物公園や勝利公園（旧児玉公園）など、多くの公園や緑地が満鉄～満洲国時代に整備され、それが中華人民共和国に受け継がれたが、公園や緑は以前に比べ

減少してきているようである。これは再開発が原因であろう。実際、至るところで住宅その他の建設が行われているのを目にする。また、満洲国時代の建築物が打ち壊されて新しい建物になっていることも、どうしても気になることである。たとえば旧満洲国興農部は東北師範の附属中学に、文教部は附属小学校にそれぞれなっているが、改修されて過去の姿は見られなくなった。満洲時代の古い建築物が消えていくのに一抔の寂しさを覚えるのは、日本人のノスタルジーでしかなく、ポストコロニアルな問題意識に欠けていると言われればそれまでだが、優れた建築や歴史的に意義のある建築が消えるのは残念だし、景観や環境への配慮という観点からも一考の余地があるだろう。その点で、近年偽満皇宮のそばで発見された南京政府の満洲国大使館（満洲国崩壊後、付近に密集して作られたバラックに埋もれていたのだという）について取り壊すか保存するかという議論が行われたようだが、この先行きは興味深い。どのように古いものを残しつつ、新しい都市を作っていくのか、長春もそうした課題に面しているように思われる。

## 瀋陽

長春は私の生活する町だが、次に取り上げる瀋陽やハルビンは旅行者として少し立ち寄った場所に過ぎない。滞在時間も短かったし、生活者と旅行者ではおのずから観点も違ってくると思うが、気づいた点を書き記しておきたい。

遼寧省の省都である瀋陽は古くから開けており、東北三省でも最も巨大な都市のひとつで、重工業の重点基盤である。近年は、公害都市の汚名を負い、外資企業の誘致もなかなか進まないなど、苦戦を強いられ、重苦しい雰囲気か漂っていたらしいが、21世紀に入ってから明るい兆しも見られるという。全体的にのんびりした長春と比べると、規模の大きい都会という印象を受けるが、ハルビンのように洒落な感じはしなかった。

瀋陽には、清朝をひらいたヌルハチやその跡を継いだホンタイジの住まいであった故宮や、その陵墓があり、近代史でも張作霖爆殺現場や柳条湖事件の起こった場所など注目すべきスポットは多い。その中で張氏帥府は張作霖・張学良の住居兼オフィスだったところ。西院、中院、東院の三つに分かれていて、西院は今も遼寧省文物局として使用されている現役の建物である。中院は四合院という中国の伝統的な建築様式であり、1914年ごろに作られているが、その数年後にはローマ様式の洋館である東院（大青楼）が作られている。両者はほぼ同時期に建てられた同じ持ち主のものとは思えないぐらい別の相貌をしている。大青楼は満洲事変のち、張学良を瀋陽（奉天）から追い出した関東軍がこれを接收、国立奉天図書館として使用されていたそうである。

図書館といえば、衛藤瀋吉氏の父衛藤利夫が館長を勤めていた旧満鉄奉天図書館も、最近まで瀋陽市鉄道図書館として使用されていた。重要建造物として登録保存されることが決まったという記事が『図書館雑誌』に載ったらしいが、実際には取り壊しが決まったようだ。旧満鉄奉天図書館はユニークな蔵書を誇る図書館だったようだが、建物はさして強固とはいえなさそうだったので、歴史的なモニュメントとして以外の価値はあまりありそうにない。旅行者の一見の印象でしかないが、ハルビンや長春に較べて瀋陽には歴史的な建築物を残そうという意思があまり見受けられなかった。おそらくハルビンは観光都市的な性格が強く、長春は満洲国の首都ただただあって強固で優れた建築物が多く建てられ、それぞれ利用価値があったからではないかと思う。

満洲国時代の奉天の絵地図を見ると、ふたつの給水塔がランドマークとして書き込まれているが、中山公園のそばの給水塔は現存している。給水塔を目指して中山公園まで来たものの、あるはずの場所に見当たらなかった。古い建築物だから、壊されてしまったのかと思いきや、ビルの裏側に見つけることができた。大きなビルがすぐ横に建っており、その影に隠れて大通りからは見えないのだが、近代的なビルと満鉄の建てた古い給水塔が共存しているのを見て、新しい街のあり方のひとつの道を探れる気もした。

## ハルビン

黒龍江省の省都ハルビンは東方の小パリなどと呼ばれた町で、欧風の建築が立ち並ぶ美しい町である。東清鉄道の建設に伴って、19世紀末からロシアの手によって都市建設が行われたこの町が、もともと満洲語で「漁網を乾かす場所」を意味する（山室信一『キメラ—満洲国の肖像 増

補版』中公新書、2004年) 小さな漁村だったとは到底想像できない。都市計画について全くの素人である私は、長春の都市計画のすごさに関しては正直なところよくわからない点が多いが、ハルビンの町の美しさは素敵だと感じる。これはロシアの町並みの「レプリカ」(ヤン・ソレッキー)として、たとえば綺麗な石畳を異国情緒として受け取ってしまうからかもしれない。しかし、それだけではないように思う。

街を歩くとひときわ目を惹き付けられるソフィスカヤ寺院はロシア正教の教会であるが、他にもたくさんのキリスト教の教会や、イスラムのモスク(清真寺)、仏教の寺院が立ち並んでいる(駅からあまり離れていない広場にあったニコライ大教会は、文革期に破壊されてしまい現存しないが)。中央大街は欧風の建物が並んでいるが、100年前のものと新しいものとがあまり無理なく共存しているように感じた。建築の様式もバロックやルネサンス様式から、折衷主義、現代建築にいたるまで、様々なものがあるようだ。ハルビンは、多様なものや新しいものと古いものと、上手く交じり合っているように思えたのである。

また、古い建築物が大変尊重され、保存に気が配られているようにも感じられた。中央大街の多くの建物にはその由来などを説明したプレートが埋め込まれている。中央大街自体がハルビン市により保存建築物に指定されているのだそうだ。これはもちろん、先に述べたように、建築や町並みを観光資源として考えているという理由が大きなものなのだろう。そういう意味では他の町に同じような措置を求めることはできない。しかし、今後中国の各地の都市においてさらに開発が進むことが予想される現在、多様性を残し、新旧がよい具合に融合しているハルビンは、モデルのひとつになってもいいのではないか。そのようなことを考えたりもした。

ちなみにソフィスカヤ寺院の中にあるハルビン建築芸術館の売店で購入した宋紅岩編著・撮影『東方小巴黎』(黒龍江科学技術出版社、2001年)は、日本の新書にさらに2センチほど幅をもたせたぐらいのサイズの建築物の写真集だが、写真とコンパクトな解説で構成されており、建築物の住所も併記されていて街歩きには有用だった。